

風土



十三夜

神蔵器

鷹一つさか落したる大井川

天上に音楽充てり烏瓜

たましひの一途十月さくら咲く

石畳は一家一石茶の咲けり

東海道焼津「やきつぺ」十三夜

註 やきつぺは焼津の伝統料理

芭蕉より西行を恋ふ返り花

富士山に正面のあり鯉の飛ぶ

茶の咲いてひとつこ一人見当らず

柿買って波郷桂郎つつがなし

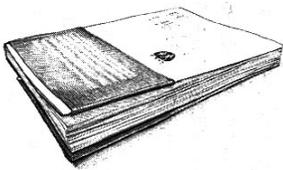
魯田の二枚三枚寺領にて

吐月峰柴屋寺

一休の鉄鉢にさび穴惑ひ

鍛錬会

一期一会三十五人後の月



竹間集

同人作品



かぐや姫

柴田 久子

かぐや姫みさうな竹を伐つてをり
襖絵の滝のぼりする茶立虫
三百の磴のぼり来て鳥渡る
鳥渡る埴輪の口の冥く開け
吊橋の一步の揺れや天高し
反転の鯉のくろがね松手入
花野ゆく少年の腕翼なす

小鳥来る

中村 洋子

小鳥来る六文銭の城下町
扁額は「海舟書屋」小鳥来る
比叡より降りる二の霧三の霧
かまつかや木の上に飛ぶ神の鶏
集合の笛に集まる大花野
秋暑しぶつきらぼうに歩きけり
自分史を書き足してをりつくつくし

秋 燕

橋添やよひ

秋つばめ茶屋に細身のをんなかな
月下美人月のしづくの一花かな
秋燕の水の切れ口日照雨あと
底紅や北座南座向かひ合ひ
重陽の弓矢抱へし烏帽子かな
首塚やあすかの畦の曼珠沙華
コスモスの影を攫ひて風の過ぐ

尻もち茄子

南 うみを

上賀茂神社 三句
まつさきに澄むてふ賀茂の禊川
二歩で越す社家の土橋の芒かな
秋扇のせはしき烏相撲かな
相撲童子禪うつすらふくらみて
重陽や尻もち茄子蒸しもして
稲刈りて轍の深手どの田にも
宮城野の萩のうねりを刈り鎮め

懸煙草

島谷 征良

いつせいに風昼顔となりにけり
桃太郎サンダーバード草茂る
つつがなく暮らすと聞くや星祭
石灯籠居ならぶ秋の暑さかな
渋取の媼らどつと笑ひけり
帰るさは臭木の花に夕日かな
早々と寝たる家かな懸煙草

禊の水

大竹 淑子

上賀茂神社 三句
萩咲くや禊の水の澄むなへに
律りちの風烏相撲の砂散らす
秋光やひもろぎの太刀立てかけて
椅子ひとつ置いて刈田の芯となす
爽籟や松の奥処に蝻まらヶ宮
青北風や渚の石のみな丸まらく
揚げ舟によべの天水あきつ澄む

月夜

宮川みね子

野分あと湧水の音のぼりゆく
痛いほど青空秋暑つづきけり
秋の蟬書棚に並ぶ故人の書
身に入むや夕日は山へ帰りゆく
蛇穴に入りゆく光こぼしつ
穴惑ひ人の後にゐて見たり
千枚の田の上にある月夜かな

竹間集作家特別作品抄

熔岩原

相沢有理子

馬柵結ふが仕事の終はり厄日過ぐ
本伏せてひとりぼつちの良夜かな
坂多き町の夕暮れ乃木まつり
十字架祭終へ月光に身を晒す
秋すだれ母端然と墨を磨る
張り板の布あざやかに秋気澄む
糸瓜忌のつくづく長きわが寿命
秋の浜能登の入り日に立ちつくす
熔岩原の釣瓶落としに帰路急ぐ
霧たちまち白き闇なす湖心かな

山河集

同人作品



神蔵器選

絶筆の仏の一字子規忌かな
一葉散る近江は碧き水の国
昏れ残る主治医の白衣秋桜
日だまりの日を恋ふ松葉牡丹かな
松本城落石狭間に零れ萩

近藤幸三郎

嵌入の金めでたしや月今宵

山本町子

池坊より頂きて

箱膳に立華の蒔絵菊節会
亡き友の詩集に挟む柿落葉
盲目の友に詩あり秋のあり
救急車のサイレン障子貼り居れば

水澄みて一重瞼の子がひとり
虫の夜の箱に戻らぬ玩具かな

浅田光代

秋日和すこし離れて座りけり
萩咲くとしづかに箸をつかひをり
月上げて埴輪に眸土偶に目

雨宮桂子

仏龕の阿弥陀三尊野分だつ
十六夜の群青世界の塔ひとつ
山の辺のあをき匂ひの稲架を組む
葛の花万葉歌碑の文字こぼれ
虫の音のとぎれとぎれに柳生道

小林共代

鬼灯の卑弥呼の色となりゆけり
宗祇水澄みて郡上に灯の点り
邯鄲を聴き分けてをり枕上
月天心奈落めく温泉につかりをり
長き夜や源氏五十三帖第二節

◇特別作品抄◇

宮の庭

間島あきら

富士裾の溶岩をそこひに草の花
とんぼうへ表戸裏戸開け放つ
かまつかや雲のはたての在り処
襟元を開く色なき風の野に
水音の裡に時待つ岳の秋
ひとひらの雲呼ぶ富士や吾亦紅
一位の実太宰治の富士の天
鬼やんま衛士となりぬる現在地
雲を追ひ水を追ひつつ初紅葉
杉並木ぬけ萩と遭ふ宮の庭

風土独語／神蔵器



絶筆の仏の一字子規忌かな

近藤幸三郎

子規の絶筆は明治三十五年九月十八日の昼前、「妹のもった画板の左下を左手で支え、右に持った細長い筆で『糸瓜咲て』と書いた。そこで碧梧桐が筆に墨をついだ。『疫のつまりし』でまた墨をつぐ。『仏かな』と書き終えると、横を向いて咳を二三度つづけざまにして痰が切れんので如何にも苦しうに見えた」。子規は続けて残りの二句を書き、筆を投げ捨てるように置いた。その筆の穂先が、白い寢床の上へ少し許り墨をつけた(碧梧桐の「君が絶筆」)。

絶筆三句の中で「仏」があるのは最初に書いた「糸瓜咲て」の一句だけである。「仏」は成仏直前の客観化した言葉であるが、写生も主観もなく生も死も超越して、澄んだ無心の境地、すでに自らが仏になっていた。この一句に無村も芭蕉もついにたどり得なかった。

嵌入の金めでたしや月今宵

山本 町子

嵌入は象眼(象嵌)の技法で、金、銀、貝殻、珊瑚などを嵌め込む。特に金の象嵌したものは最高級品である。このため、あた

ら名品を意図的に割り、金で接いで、より優れた景色を演出して、今日までその名の高い名品もあるやに聞いている。

作者は九十四歳。すでに第一線からは引いていられるものの生涯茶人である。今宵は仲秋の名月、久しぶりに家宝のお道具をととのえて、わが身一人のお点前に充ち足りた至福の時を過ごされていられるようだ。

すぐきや六郎兵衛秋風の真正面

池田 光子

すぐきは酸茎菜(すぐきな)の漬物で、晩秋から初冬の頃に漬けて込む。季語としては冬になっている。京都市上賀茂・北白川・一乗寺辺の特産である。

この句は「すぐきや六郎兵衛」が面白い。おそらくすぐき屋を始めた初代の名で、今日まで代々「六郎兵衛」を屋号としているのであろう。

すぐきは四斗樽の漬物に、通常重石二十貫といわれ、乳酸発酵した酸味がある古漬物である。一般的にはこまかく刻んで、ビニールの袋に入れて売られているが、通の人というか、よく好む人たちは一本漬をまるまる買って行く。すぐきの白い根のところは大根より蕪に似て、人間のやや三角の顔に似る。大小の雛、何となく好々爺の感じがする。名前のごろ、ひびきも一度聞いたら忘れられないなつかしさがある。(以下略)

風土集



神蔵器選

舞ひ降りし鳩の視線に水を打つ 横浜 安永 圭子

雲上をすべつてゐたり昼寢覺
墓洗ふ光背のごと鱗雲

初花の聖女と紛ふ醉芙蓉
白露に朝刊届く時間かな

白萩の一叢 私設美術館 津山 生田恵美子

秋燕の細身一途にひるがへる
氏神へ参道長き刈田道

来る猫を拒まず寺の秋日和
籐籠にバゲット立てて小鳥来る

坂の上の雲の動かぬ瀬祭忌 平塚 中沢 三省

母を恋ふ波郷の句碑へ秋の蝶
みちのくの一輛電車稲の花

鬼灯や妻の栞りし日記よむ
音合はず弦楽器室九月くる

新蕎麦や割りばしを割る音を立て 京都 杉本葉圭子

腕時計外したきほどの残暑かな
美しき稲穂の波や近江富士

我が師系硬骨漢あり赤のまま
草刈りて残りし萩の風に立つ

衰へは雄松にしるき秋暑かな 川崎 中根 美保

羽根ペンが打つピリオドや涼新た
水音の昂りきてはばつたんこ

新涼や樹下の箒目こまやかに
搾りたるかぼすに曇るグラスかな

永らへて秋刀魚の候を見逃さず 舞鶴 福田 周草

月光やわれに戦後の貌一つ
草や木や鳥もけものも水の秋

目覚めぬて雨戸の隙や寝待月
地に還る落葉は風を恨まざり